

種名 クズ  
万葉時代の呼名 くず



詠人 作者未詳

万葉集卷十二 三〇七二

大崎の荒磯の渡 延ぶ葛の  
行方もなくや 恋ひ渡りなむ

### 【現代訳】

大崎の荒磯のあたり一帯に果てしなく延びてゆく葛のように、これからも行方定めず、恋しさをつのらせてゆくわたしのだろうか

### 【クズの解説】 マメ科のつる性の多年草

秋の七草の一つで、根を用いて食品の葛粉や漢方薬が作られる。葉は3出複葉、小葉は草質で幅広く、とても大きい。つるは年がたつと太くなり、やや木質化する。地面を這うつるは、節から根を出し、あちこちに根付く。花は8~9月の秋に咲き、穂状花序が立ち上がり、赤紫の豆の花を咲かせる。花は甘い芳香を発する。和名は、かつて大和国(現:奈良県)の国栖(くず)が葛粉の産地であったことに由来する。荒れ地に多く、人手の入った藪によく繁茂する。刈り取りを行わない場合、クズの生長はすさまじいものがあり、ちょっとした低木林ならば、その上を覆い尽くす。駆除は、根茎により増殖するため根絶やしにすることが困難である。食品の葛粉(くずこ)はクズの根を晒して作る。葛切りや葛餅などの原料となる。室町時代、とある山中で、猪が葛根をしきりに掘り出そうとしているのを見た人が「食べ物ではないか」と思いついたのが、食糧として認知された始まりであるという伝説がある。